

歩く

小川 国夫

数年前に見たナイルデルタの牛は、井戸のまわりをひたすら回っていた。私もそのように、家のまわりを回り続けるパツとしない散歩愛好者だけれど、この歩みは何かのミニアチュールだと見てくれる人はいないか。歩くことは多くのことを象徴する、と思うのだが。

旧制志太中学の生徒だったころに、スケッチブックを片手に近所の山野をうろつくようになった。蓮華寺池をはじめ、葉梨村や稲葉村へはたびたび行った。おおかた歩いた。少し遠出したくなると、自転車に乗って大井川とか焼津港、大崩などへ出向いた。絵を描きたいという少年は多いだろうが、だからといって、普通私ほどうろつくことにはならないのではないか。絵を描きたいからうろついたのか、うろつきたいからスケッチを口実にしたのか、今でもわれながら解らない。往時のスケッチブックで今に残っているものを見ると、心覚えのデッサンなのだから当然とはいえ、さながらうろつきの記録なのだ。もし一点一点に日付けが入れてあったとしたら、かなりくわしい日記ともなろう。

少年の衝動がこのように働いたわけだ。それにしても、後年ヴァン・ゴッホについて深入りし、その遍歴の土地をたどって見ると、ゴッホもまた歩きに歩いた人だと実感すると同時に、絵が彼がその時そこにいたことの記録であることが解った。その意味でゴッホは徹底したリアリストであった。いわゆる想像画は一点も描いていない。私はゴッホを調べながら、この記録性に気づいて、身につまされた。そして更に考えたのは、歩き回り目に触れたものだけを写し取ることは、果たして外界だけを問題にしているのだろうか、ということであった。この場合、画家の内面はどのような扱いになるのだろうか。これは勿論、ゴッホの作品を凝視しながら結論を出さなければならない問題であったが、それには少年であった私自身のささやかな体験が役に立った。外界（客体）と内面（主体）にはどのような通路があるのだろうか、と私はヴァン・ゴッホに問いかけ、それから更に、セザンヌやウラマンクに問いかけ、同時に、小さな声でひそやかに私自身に問いかけるのであった。

文学も私をうろつくようにうながした。ハイティーンの中の私の愛読書の中に志賀直哉や國木田獨歩があった

といえば、それだけでさもありなんと合点してもらえらるだろう。志賀直哉もよく動いている。動く自分をとらえて書いた小説が多い。獨歩の場合には《武蔵野》を考えてもらえばいい。この手記はひたすら歩くことが、そのまま武蔵野への愛を打ち明けていることになるように書かれている。だから《武蔵野》に心惹かれるほどの読者は、必ず獨歩にならって山野を愛し、自然な愛の行動としてそこをうろつき始めるようになる。

他にも、うろつくことと切っても切れない文学者をあげればきりがなく、私に及んだ影響も一口にはつくせないけれど、今回は國木田獨歩を特記するにとどめる。この作家の印は確かにわが身に感じられるし、それが尾を引いて、今日の私の散歩ごのみにつながっていることもはっきりしている。

現在私が淋しく思っているのは、昔ながらの足取りで散歩しながら、埃がたちこめる街道に灯影を抱いて暗くうずくまる家並みにさしかかったり、犬の吠え声がきわ立っている静寂に包まれてたたずんでいたりできないことにある。人事の変貌をそれほど惜しむわけではないし、現代には現代の顔があるのは当然とは思いますが、現代の顔には気持ちが十分に寄り添えないうらみがある。なぜそうってしまったのだろうか。

論じれば長くなってしまいうだろう。ここではかつて武蔵野で得た印象をただ一つだけ書いておこう。その折りには、私はある出版社の依頼で武蔵野のレポートを書こうとして実地に当たっていたのだが、どこへ行っても疾走している自動車の絶え間ない列に、今更のように驚いたのだった。それで、獨歩の時代には有機的な一体であった大平野に、今やいく筋もの亀裂が入ってしまった、と嘆いたのであった。

遠くから陽に輝きながら移動してくる白銀の雨を、獨歩は感覚を澄まして待っていた。そうした地点が今でもないわけではないだろう。しかし、縦横に亀裂が入ってしまった平野にあって、そうした地点はまるで特別に保護されているのかのようだ。一種の風致地区のおもむきだ。なぜ風致地区ができてしまうのだろうか。きっと人事と自然がまったく相容れない形に乖離したからだろう。人間の営みにとって自然が公害となることはないけれども、自然にとっては人間の営みは総じて公害となってしまったからだろう。

(第19回卒 作家)